

序曲 (曲ったペン)

私は明るい愉しい詩が書きたい  
読む人の心が

秋空のように晴れ晴れするような

私はそんな詩が作りたい

私のペンは愚かなのか

一度もつと

その先手からは

暗い くらい

悲しい文字しかうつしとせな

私は真実の美しさを描きたい

燃えろみどり背景に

真紅の赤旗が反戦旗と共には

あの五月逆巻のことなと

私は思い切り祖に描きたいのたか

その度の

怒りと

憎しみの火バサが

文字よりも早く

ペンは不自然に曲って今にも折れそうだが

九五一七五

